

県内から優秀賞2人

毎日農業記録賞

農業や食、環境への思いについて体験や提言をつづった「2022年(第50回)毎日農業記録賞」(毎日新聞社主催、農林水産省・県・県教委など後援、JA全中など協賛)の



入賞者が発表された。県内からは、一般部門で日光市の農業、半田耕一さん(64)の「観光都市・日光の食のブランド価値を高める挑戦」が優秀賞に選ばれた。高校生部門では、那須拓陽高3年の西岡桃さん(18)の「地大豆が拓く新しい扉」が優秀賞を受賞し、全国農業高校長協会賞にも選ばれた。

そばで地域おこし挑戦

一般部門・日光市 半田耕一さん(64)

のどかな田園風景が広がる日光市岩崎の里山に、素朴なプレハブ小屋のそば店「観世音そばの家」がたたずむ。周囲にある10秒の広大な畑で育てた自家栽培そばを提供し、午後2時前には品切れする人気店だ。米農家の3人きょう

1年間修行した後、そば栽培を始め、店を開

地大豆「未来につなぐ」

高校生部門・那須拓陽高3年 西岡桃さん(18)

だいの長男。宇都宮農業高(現宇都宮白楊高)を卒業後、宇都宮市の文員店に就職し、営業マンとして27年間働いた。転機は父親が亡くなった年齢と同じ45歳の時。人生の区切りになった年輪と同じ45歳の時。人生の区切りになった地域のおこしに挑戦しようと思った。

江戸時代から続く米農家の15代目である母の元に生まれた。幼い頃から母や祖父と一緒

て企画運営に挑戦した大豆の収穫祭「オダイズサイ」では、地元公民館館長からは「こんなにくさんの



栽培するそばの美を手にする半田さん||日光市岩崎で

「植物に関わる仕事をしたい」と農業高校に進学。「SoyPro同好会」という、地元や日本各地で古くから栽培されてきた「地大豆」を育て、加工事業所と連携しながら商品作りなどを行う学科横断型のプロジェクトに入った。

受賞作は「地大豆が拓く新しい扉」。3年間、SoyPro同好会で取り組んだ大豆栽培やしょうゆ作りの経験で感じたことをつづった。実行委員長とし



育てた大豆を収穫した西岡桃さん||那須塩原市中永田4的那須拓陽高で

技術総合研究機構から提供を受け、栃木県のそばブランド化に向けた新品種の試験栽培に励んでいる。

受賞作では、そばの基礎知識から店舗経営のノウハウを伝授する「そば大学」を構想した。「人材を育てること」で、日光の食文化の継承と、市への移住促進、商工の発展に寄与できれば。生産者、流通業者、そば屋、そして行政との四身一体を大切にして、実現していきたい」と語る。そばへの情熱とアイデアは尽きない。【渡辺佳奈子】

人が集まるなんて驚いた。地域の方々がとても喜んでいた」と言われ、うれしかった。同好会の活動の中でも特に印象に残っているといい、「大豆を大切に育てることで人とのつながりができた。頑張ってきたよかったと思っただけ」と振り返る。今年は大原市内の

△一般部門▽

「『農家の嫁』となった私の仕事は農作業ではありません〜マーケティング思考で魅力発信〜」長谷川紀子さん||足利市▽「女性もできる農業へ、夫婦で二人三脚〜直播栽培やスマート農業を取り入れて〜」遠藤昌宏さん・和子さん||大田原市△高校生部門▽

「農業って最高なんだ〜捲土重来、届け革命と後藤徹平さん||那須拓陽高2年

LRIT 試運転始まる

すでに走った。作業員が集の表れだと思ふ。改停留場と車両が接触しなくてこの事業の難しくないかや、信号設備のさ、奥深さというのを

試運転を始めたライトライ平石停留場で